

アメリカ黒人革命と黒人コミュニティの変貌

島田法子

I

1950年代以降、アメリカ黒人に関しては、市民権運動、人種統合運動、ブラック・パワー運動が華々しい脚光をあび、すでに多くの研究がなされてきたが、それに対してそれらの運動の影響で大きく変化した黒人コミュニティについては、あまり注目されずに今日に到っている。黒人コミュニティは根本的な変質をとげているように見受けられ、今後徹底した研究を必要としているように思われるのである。黒人の居住地区の分離という状況は、1960年代の人種統合運動後も変わっていない。むしろ郊外の発達による白人移住によって、都市中心部は一層黒人化している。郊外は95%以上が白人である。¹⁾しかしながら黒人居住区をコミュニティの視点からみると、非常に流動化・階級分化しており、質的に新しい状況が現れているのである。

同時に、地域共同体の崩壊と大衆社会の出現ということが、あらゆるコミュニティに関していわれている。すなわち都市化、産業化、官僚制化という現代アメリカの基本的要因によって社会が画一化され、人間を物質として扱おうとする圧力によって、活気あるコミュニティ・ライフが消滅したということである。黒人コミュニティに関しても、この大衆社会化の圧力を無視することはできない。アメリカ社会全体を規定しているこの大きな枠組の中で、人種差別によって特異な成立過程、成長過程をたどってきた黒人コミュニティがどのような変貌をとげたか、という点にも留意しながら、「黒人革命」の時代の黒人コミュニティの変質と問題を探ってみたいと思う。

II

まず簡単に、黒人革命以前の黒人コミュニティについて、歴史的に展望してみよう。アメリカ黒人固有の「ゲットー」と呼ばれるコミュニティは、19世紀末からの解放黒人の北部移住に始まる。ギルバート・オソフスキーの『ハーレム：ゲットーの成立過程』や、アラン・スピーアの『ブラック・シカゴ』などの研究で明らかのように、1910年頃までには新しい形態の黒人コミュニティ、すなわちゲットーが成立した。居住地区が隔離されただけでなく、社会生活や経済生活も隔離化され、黒人だけの制度や組織がゲットー内に発達した。そして1920年代には「ブラック・メトロポリス」あるいは「都市内の都市」と呼ばれるほどの自給自足的な独立したコミュニティが形成されるに到ったのである。ほとんどの都市機能がゲットーの中で足せるようになった。有機的な組織が網の目にはりめぐらされ、社会的相互作用の密度は濃く、コミュニティ意識も強かった。「セルフ・ヘルプ^{セルフ・ヘルプ}」や「黒人は黒人商店で買物をせよ」といったスローガンのもとに、黒人コミュニティの団結と人種的向上が目標として掲げられ、ゲットーの発

展は人種的な誇りの源となっていた。あらゆる黒人が狭いゲットー内に住むことを強制された結果、黒人は初めて自分たちの人種的成果を得ることになったのである。

黒人にとっては、北部移住とゲットー形成は重要な民族的経験であった。そしてそれは黒人文化の貴重な源となり、黒人コミュニティの共通の紐帯となったのである。スピーアの言うように、当時の北部移住は単なる経済的な追求であるだけでなく、旧約聖書の出エジプト記にも似た「自由と約束の地・北部」への民族大移動の面をもっていたのである。「脱出によって生じた感情は、黒人人種意識の成長と深くかかわりあっていた。……移住はある種の結合を発生させた。移住は黒人が共有する歴史的経験と苦難から生じたものだったからである。」²⁾ すなわち、南部経済の疲弊、北部産業の興隆、第1次世界大戦を背景に起きた黒人の北部移住ではあったが、それは精神的には自由と平等の約束を追求する人種的体験となったのである。南部を知らない北部生れの黒人でさえ、黒人新聞などの情報を通して移住体験に参加したのであった。³⁾

過去にみられなかった人種意識と誇りがゲットーを満たした。1920年代と1930年代のシカゴを研究したSt. C. ドレイクとH. R. ケイトンによれば、「ブラック・メトロポリスは全階級の黒人にとって誇りの的」であったし、それは「われわれ自身の」ものであり、またそれは「ある種の自由が存在する具体的証拠」でもあった。⁴⁾ ゲットーはすぐれた黒人リーダー層を育成した。小規模ながらも黒人消費者を対象にした黒人ビジネスマンが抬頭し、黒人地区を選挙区とする職業政治家が出現し、ボス政治の恩恵にあずかって市の公職につく黒人も増えた。ドレイクとケイトンの「ブロンズヴィル市長選挙」の描写は興味深い。シカゴのゲットーでは、1930年以來「市長」を選ぶ模擬選挙まで行い、共同体としての紐帯を強めていたのである。「市長には普通ビジネスマンが選ばれた。彼は華々しい儀式と舞踏会で就任する。彼はその任期のあいだ、コミュニティの熱気あふれる向上心のシンボルとして奉仕することを期待されるのである。」⁵⁾ 確かにそこにはコミュニティ・ライフが存在していたといえよう。

もちろんこうしたゲットーが黒人にとって理想郷であったのではない。貧困、無知、犯罪、非行、家庭崩壊などが広く存在していた。C. S. ジョンソンの『プランテーションの影』に描かれているような前産業的、閉鎖的、権威服従的な南部プランテーションから一夜にして産業化された、官僚的、個人主義的な北部大都市に移住したのであるから、適応過程で問題が起るのは必然のなりゆきであった。E. F. フレージャーはいみじくもこれを「劇的なエピソードに満ちた、中世から現代アメリカへの飛行」と呼んでいる。⁶⁾ 古い生活様式は覆えられ、習俗やモーレスは破壊され、思想や行動は混乱していった。ゲットー内の社会問題の多く——家庭の崩壊や青少年犯罪——は大都市への適応過程で不可避免的に生じた結果であった。⁷⁾ またE. ハーウッドの移民と黒人のゲットーの比較研究で明らかかなように、移民は人種差別に基く経済的差別を受けなかったばかりか、社会組織、宗教的文化的伝統、家族制度という無形の財産をもっていたので移住後の適応が比較的スムーズに進行したのに対して、黒人はそのような問題解決の手段に欠けていたのである。⁸⁾ しかしながら黒人は力の及ぶかぎり、社会福祉機関をゲットー内に発達させて援助活動を行ったし、黒人教会も福祉活動に参加し始めた。また一方の移住者たち自身は南部農村の伝統のいくらか——代表的な例はストア・フロント教会——をゲットーに移植して、自らの適応を助けた。ゲットーは理想郷からは程遠いものであったが、黒人はゲットーを守り育てたいと願っていたのである。ドレイクとケイトンによれば「ほとんどの黒人はたぶん同じ目標を抱いている——つまり、自分の願う所には自由に行くことができる『権利』の確立と、自由意志で選択したある種の大きな黒人コミュニティの保全とである。」⁹⁾

その目標のうち、行動の自由の「権利」は1960年代の黒人革命によってほぼ達成されたのに対して、逆に「黒人コミュニティの保全」の方は失われてしまったように思われる。一方で人

種差別の外圧が弱まり、他方で大衆社会化の圧力がかったとき、かつて栄えた「ブラック・メトロポリス」は崩壊せざるを得なかったように見うけられるのである。次に1960年代以降のゲットー・コミュニティの変貌を分析してみよう。

III

黒人革命の起る1960年代直前の黒人コミュニティは、ほとんど初期のゲットー・コミュニティと基本的には変わらずにいたようである。『ブラック・メトロポリス』の著者たちは1960年に再びシカゴのサウスサイドを調査したが、彼らはそこには「今なおまとまった自己意識的コミュニティが存続している」ことを発見し、その住民の基本的な価値感や、基本的な社会構造や、コミュニティとしての文化パターンにはほとんど変化がなかったことを報告している¹⁰⁾。しかしドレイクとケイトンは、かつて1920年代や1930年代に唱道された「自給自足の黒人経済」という主張は、あくまでも防衛手段としてのスローガンであって理想ではなかったこと、そして今や黒人消費者は白人企業に向っており、黒人企業の育成のために犠牲を払う気がないことも報告している¹¹⁾。

1960年以降には、このような黒人コミュニティの自給自足性や孤立性の喪失は、黒人革命によって決定的となった。市民権運動や人種統合運動はゲットーの経済生活、社会生活、政治生活を大きく変えた。黒人をあらゆるレベルでゲットーに封じ込めようとした外圧が弱まると、ゲットー内の結束力は必然的に拡散していった。例えば、ハーレムの黒人は今やミッドタウンやダウントウンで仕事に就き、ハーレム外の商店やデパートで消費生活をし、ハーレム外の劇場や映画館や野球場で余暇を楽しみ、NAACPのような組織の本部でさえ今やハーレム外のミッドタウンにオフィスを構えている。黒人の生活は今や大幅にゲットー外に吸収されたのである。

近代技術——なかでもテレビとハイウェイ——の発達、別の面からゲットーの自給自足性を奪う役割を果たした。白人大企業はマス・メディアを通じて大衆に宣伝し、ゲットーの壁を乗り越えて黒人大衆にもメッセージを届けるようになった。また発達した交通機関のおかげで、ゲットーの黒人も郊外の新しいショッピング・センターでの消費生活に参加できるようになり、全国共通の大衆社会型消費生活に組み込まれていった。

一方黒人革命の成果として連邦資金が黒人コミュニティに投入されると、その恩恵にあづかれた黒人は中産階級化し、取り残された黒人は貧民化するという分極化傾向がみられた。J. バーナードが指摘するように、ゲットーに注ぎこまれた連邦資金は、構造的貧困には有効に効果を表し、労働者階級を中産化したのに対して、「逸脱的貧民」は対象外にはずされて取り残されてしまったからである¹²⁾。高度に産業化された社会においては、教育レベルの低い未熟練労働者はますます雇用の機会がせばめられ、失業に追いこまれる。一方豊かになった産業化社会は福祉制度を整備してきたので、失業者は容易に福祉に依存することになり、その結果ゲットーには福祉受給者があふれるのである。黒人の福祉受給率は、1961年の8%から、1971年の21%へと急激に高くなっている¹³⁾。また年収4000ドル以下の低所得世帯では、1969年には年収の40%が福祉か年金で占められており、その依存度は1959年の26%を大きく上まわっている¹⁴⁾。さらに貧困層では家庭の崩壊現象が著しく進み、貧困世帯数に占める母親が世帯主の世帯数は1960年の30%から1970年の60%へと倍増したのであった¹⁵⁾。

その一方で、高校入学以上の教育を受けるチャンスを生かした黒人層は、産業化社会の繁栄の恩恵にあづかって中産階級化したことが指摘されている。D. ストリートなどの調査研究によると、1950年代初めには中産階級以上の黒人は5%にすぎなかったのが、1960年代末には25

%にも達し、1970年度には黒人全世帯数の半は年収が実に1万5000ドル以上に達した¹⁶⁾より面密にデータを分析したS. A. レヴィタン、W. B. ジョンストン、およびR. タガートの研究によると、中・高等教育の普及と賃金の上昇によって、ホワイト・カラーのみならず、工場労働者、職工、サービス業従事者などが貧困層から中産階級化したことが明らかにされている¹⁷⁾。これらの事実からいえることは、教育レベルの低い年収4000ドル以下の貧民層と、中等教育以上で年収1万5000ドル以上の中産層とが、それぞれ増加傾向にあること、また2つの階層の年収の差は以前より拡大していること、そして黒人コミュニティはかつてのように95%までが下層労働者（そのなかでの細かい階層区分はつけられていたが）で占められていた時代とは異り、大きく階層分化が起きていることである。この階層分化は必ずしも固定的なものではないとしても、黒人コミュニティを分化、多様化する力として働いたことは否定できないであろう。

さらに、黒人革命のおかげで黒人は、かつてのような狭い地区にあらゆる階層の黒人が押し込められるという状況から解放された。そして今日のゲットーはまとまりのある一地域ではなく、広い地域にまたがるものになった。その結果として、ゲットー内で、各階層ごとに居住地区が分離してゆく傾向が現れた。E. C. バンフィールドは、中流上流の黒人だけが集って気持ちのよいコミュニティを作ることになるだろうと述べている¹⁸⁾。あらゆる階層の黒人が混りあって住み、共通した人種的体験に基づいて共同体を作るという、かつてのゲットー・コミュニティは姿を消してゆくのである。

一方低所得層の黒人は、最も望ましくない地区に取り残された。それはすなわち、各地で起っている「ゴーストタウン化」された新しいスラム地区である。ニューヨークの例をとってみると、都市再生計画のために家を失った低所得層の黒人は、ユダヤ人、イタリア人、ポーランド人、アイルランド人地区へと移ってゆき、それらの民族集団を郊外へと追いやったため、黒人地区はハーレムやセントラル・ブルックリンから、ブラウンズヴィルに広がり、さらにそこからイースト・ニューヨーク、ベッドフォード・スタイヴサント、クイーンズ区やサウス・ブロンクスへと広がっていった。そしてかつての移民地区が黒人地区になったとみるや、白人家主たちは建物の修理維持をやめて荒廃するにまかせ、取れるだけの家賃を取ったあと、改善の要求が市当局や住民から出ると、建物を放棄して姿をくらましてしまうのである。そして住人のいない荒廃した建物がふえて町全体がゴーストタウン化してしまった。ニューヨーク・タイムズ紙の報道によると、

建物放棄は〔イースト・ニューヨークだけではなく〕ブラウンズヴィルや、サウス・ブロンクスや、ハーレムにも伝染しているし、またニューヨーク市の他の20あまりの地区を「正真正銘」のゴーストタウンにしてしまう脅れがでている。……またそれは全国の他の都市でも危機的な問題となっている。¹⁹⁾

安いアパートのある地区がゴーストタウン化した結果、低所得層の黒人はきびしいアパート不足に悩まされ、やむをえず恐怖と怒りとあきらめの中で、最悪の状態のゴーストタウン化した地区に残るはめに陥っている。このような地区には、コミュニティと呼べるものは存在しない。すなわち、コミュニティとしての要件である共通の紐帯や、人間的な交りや、社会的相互作用が希薄なのである。黒人の居住地区が、白人地区から孤立しているというだけで、そこに有機的なコミュニティが生まれてくるわけではないのである。

しかしながら、このような最下層黒人の居住する地区をのぞけば、ゲットーには今もコミュニティ・ライフが多分に残っている。1968年に『ダイダロス』誌に発表された「都市後の時代」の中でM. M. ウェバーは、近代技術の発展が地域共同体としてのコミュニティを不必要で無意味なものにしたと論じているが、その例外として、産業化された近代社会からとり残された

弱者にだけは、地域共同体が残されていると論じ、黒人ゲットーをその例としてあげている。

ニューヨークのハーレムやアメリカ南部では、前産業社会の最後の生きた化石の若干がみられる。そこでは村落の様式がほとんどそのままに息づいている。そこでは暴力団の縄張りが街区をつくり、ティーンエイジャー達のギャングがかれらの縄張りをめぐって戦っている。中心都市のスラム街には、われわれが置き去りにした、²⁰⁾ 純粋な土地にもとづく社会的近隣地区だけがある。

1974年に出版されたH. R. リンチの『都市の黒人地区の状態』は、ゲットーという言葉のもつマイナスのイメージ（荒廃、犯罪、暴力）に対抗して、ハーレムには今も生き生きとした人間的なコミュニティ・ライフがみられることを示している。²¹⁾ 同じく1974年に出版された『醜い都市再訪』の中でバンフィールドは、ボストンのワシントンパークの黒人が白人地区に移転するチャンスを与えられたにもかかわらず、それを拒否して黒人地区に残る選択をした例をあげて、黒人ゲットーは人種差別による隔離地区なのではなく、黒人自身が黒人だけのコミュニティ・ライフを楽しむために集まっているにすぎないと論じている。確かにゲットーの中には、他のアメリカ社会の地区と比較するなら、まだコミュニティと呼べる生活様式がより多く残っているのかもしれない。（ただしそれはかつての自給自足的ブラック・メトロポリスではない）。

ゲットーにコミュニティが残されているのは、黒人が産業化社会から取り残された弱者であるからだけではなく、その理由を理解するには、ブラック・パワー運動の影響を考察しなければならない。この運動のおかげで、「人種意識」に基く地域性をもたない精神的な黒人コミュニティが新たに生まれたこと、そしてそれに触発されて、地域共同体の活動が活発化してきたことが指摘できるのである。

IV

黒人を画一化して大衆社会に巻き込む働きをしたマス・メディアは、同時にブラック・パワー運動を華々しく、しかも同情的に報道することによって、黒人人種意識を目覚めさせる働きもした。その結果、ゲットーの黒人大衆は、マルカム・XやS. カーマイケルに親近感を覚えるようになり、ゲットーで起きた小さな事件よりもフリーダム・ライドやワッツ暴動に関心をもつようになった。自分の居住地区に対しては応々にして否定的な感情——怒り、敵対心、不信感——しかもてない下層黒人も、ブラック・パワーによる人種意識のコミュニティには肯定的な一体感を抱くことができた。「今すぐ自由を！」とか「ブラック・イズ・ビューティフル」といったスローガンがマス・メディアを通してあらゆる黒人にメッセージを届け、ブラック・パワーの活動に関する報道が彼らをふるいたたせ、新しい連帯感を作り出したのであった。

この「人種意識」に基く精神的なコミュニティは、黒人に権力参加をもたらした点でも新しくなった。ピューリタン時代から、権力への住民参加はアメリカのコミュニティ理念の一つであったにもかかわらず、かつての黒人ゲットーには最初から権力参加の理念がなく、またあったとしても黒人コミュニティの権力はごく限定されており、派生的で、外部社会に由来するものであった。権力的に無力であるがゆえに、社会学者たちは黒人ゲットーを権力構造の研究対象からはずしてきた。²²⁾ところが、1960年代にブラック・パワー運動がおこり、直接行動による「体制」への挑戦が始ると、黒人コミュニティは権力闘争の視点から注目されるようになった。ブラック・パワーは新しいタイプの権力参加行動であったとみることができよう。最初はデモ行進、ボイコット、サボタージュ、破壊行為などを手段に、マス・メディアを通して大衆に直接的に接近することによって権力を握った。そしてやがて財産所有権、ゲットー内の学校や警察

の管理、地方政府へ代表を送りこむことなど、権力資源の獲得をも目ざすようになったからである。

M. R. スタインによれば、このような活動は人間を画一化する大衆社会にも生き生きした人間のドラマが残っている証拠であって、そのようなドラマにはコミュニティの側面がみられる。それゆえこのようなドラマに「継続的に焦点をあてつづけることはコミュニティ研究の特別の責務」なのである。²³⁾ またスタインは、中央集権化した官僚機関の「『見えざる』コントロールの仕組や、『隠された』矛盾」は、今やあらゆるレベルですっかりさらけ出され、今まで無力だったサブ・コミュニティは、今までにない大きな規模で「自分で判断や、自己変革のむくろみ」に着手し、外部社会の手で「積み重ねられてきた『軽蔑』や、『自己卑下』の体系的なネットワークに、自らが主体的、直接的に攻撃」するようになったと論じるとともに、「この最もはっきりした例は、おそらく、アメリカの黒人たちのあいだで起きたものであろう。」と述べている。²⁴⁾ J. バーナードも同様にブラック・パワーが黒人コミュニティに及ぼした影響を高く評価している。バーナードは、黒人が黒人文化というサブ・カルチャーが存在することを認識し始め、黒人のみが理解できる精神的な絆を基盤として、白人文化に対抗するために精神的コミュニティを形成しようとしていると論じ、ブラック・パワーの指導者は外部からの圧力がゆるんで黒人コミュニティが崩壊してしまう前に、民族的多元論と黒人文化の確立を図ることが必要であることに気づいたと指摘している。すなわち人種統合主義や人種にとらわれない人間主義を拒否して、黒人だけで連帯し、解放された自己認識に到り、その上で白人と対等の集団としてアメリカ社会に進出してゆくべきだというのである。²⁵⁾

白人文化から独立分離した黒人文化が存在するかどうかは議論の分れるところであるが、しかしこの概念は新しいコミュニティを形成するうえで建設的で有効であったことは明らかである。第一に、中産階級化して白人文化に適応していた成功者の黒人たちが、ブラック・パワーによる意識変革によって黒人コミュニティに引戻された。白人のマス・メディアがブラック・パワーを承認するのを見て、彼らも安心して黒人であることの誇りを回復した。そしてブラック・パワー活動にも参加し、リーダーシップを提供するようになった。第二に、下層黒人たちは、黒人のことばで話し、黒人らしくふるまうことが自然なことであるという、黒人としての自己認識を与えられ、自己卑下から解放され、最大の問題点であった疎外と無関心を克服するようになった。こうして、経済的には階級分化しつつある黒人たちは、「人種意識」のコミュニティで再び連帯して、共に支持し合う可能性をもつようになったのである。

確かにこの「人種意識」に基づく精神的なコミュニティの連帯感には限界がある。ブラック・パワー運動が地方政治に進出し、財産所有権を主張し、ゲットー内の学校、公共施設、警察の自主管理を要求して、権力資源の獲得にふみ出した時、黒人内部でイデオロギーや政策をめぐる対立が起きたし、ブラック・パワー指導者のなかでの権力闘争がマスコミをにぎわした。例えば1964年に開始された貧困との戦いは、当初「最大限に可能なコミュニティ代表の参加」を宣言していたので、連邦資金を統制しようとして内部闘争が起った。また1970年代になると多くの都市で黒人市長が選出されたので、ブラック・パワー活動の指導者は応々にして黒人市長と対立するはめに陥った。ニューアーク市の例をとると、1970年にケネス・ギブソンが市長になり、黒人が市の官僚機構の実権を握るようになった。白人側は動揺をきたして郊外への移住に拍車がかかった。また暴動による破壊と建物放棄による市の荒廃は目に余るものがあつた。そこで市長は穏健政策が市の再建のために必要と判断した。しかし黒人文化運動の急進派指導者リロイ・ジョーンズはギブソン市長が白人を警察署長に任命したことを痛罵し、市立図書館には白人の本しかなく市立美術館には「白人植民地主義芸術」ばかりだと非難をあげた。市の

黒人の間には分裂がおり、上層の黒人にはニューアークを見捨てて出てゆく者も出た。²⁶⁾

そのような限界はあるものの、ブラック・パワー意識が黒人コミュニティにもたらした功績は決して過大評価されることはあるまい。市民権法が成立しても人種差別はなくならなかったが、黒人はすでに平等の法的保障にたよる段階をのりこえて、実力で権力参加を勝ちとることを学んだ。また人種統合運動によって黒人コミュニティが統合化されることはなかったが、黒人はむしろブラック・パワーに基く多元主義を受け入れて、それぞれのコミュニティで住民運動を起すようになった。貧困との戦いに参加した多数のゲットー黒人は、莫大な連邦資金や民間資金を引き出すことに成功し、権力行使に参加することを経験し、そこから貴重な教育的訓練を得た。そのうえコミュニティ政策には住民の発言を取り入れねばならないという前例をひらいた意義も大きかった。²⁷⁾ またコミュニティ・コントロールの住民運動の参加者は、運動を成功させるためには地域社会の団結が必要であることを痛感して、学校などをコミュニティ・センターとして地域活動を始めるようになった。²⁸⁾

今までみてきたように、黒人革命の起きた1960年代以降には、かつてゲットー形成の第一原因であった白人社会からの外圧が弱まって、ゲットーの自給自足性や孤立性が失われていった。そのうえ、高度の技術進歩や官僚制化という新しい力が黒人ゲットー・コミュニティを大衆社会化して内側から崩壊させていった。また教育や雇用の改善によって多くの黒人が中産階級化したため、経済的にも人種的一致団結の基盤が失われつつあった。すなわち、黒人革命の時代は黒人コミュニティにとっては、流動化と分化をもたらした変動の時代であったのである。コミュニティの視点からみるなら、それは崩壊の時代であったということもできるであろう。しかしそのような変動を経て、黒人コミュニティが消滅してしまったかというところではなく、新しい連帯意識がブラック・パワー運動から生れて定着したように思われるのである。かつて北部移住とゲットー形成が重要な民族的経験となって精神的・文化的な紐帯の役割を果たすように、ブラック・パワー運動も黒人人種意識の成長に深くかかわっていたと言えよう。今後も黒人の居住地区は白人地区から分離した状況が続く見通しである。黒人はブラック・パワーの人種意識によるコミュニティを育成して、力の源を自分たちの手で大きくしななければならないことに気付いている。今後研究者はスタインのいうように、黒人がこの「人種意識」と団結力で地域共同体の活力を復活させることにどの程度成功するか、目を留めつづけてゆかねばなるまい。

【注】

- 1) David Street and Associates, *Handbook of Contemporary Urban Life* (Jossey-Bass Publishers, 1978), p. 204.
- 2) Allan H. Spear, *Black Chicago: The Making of a Negro Ghetto 1890-1920* (The University of Chicago Press, 1967), p. 130.
- 3) E. Franklin Frazier, *The Negro Family in the United States*, revised and expanded edition (The University of Chicago Press, 1948), p. 229-30.
- 4) St. Clair Drake and Horace R. Cayton, *Black Metropolis*, revised and enlarged edition (Harcourt, Brace & World, Inc., 1962), p. 114-5.
- 5) *Ibid.*, p. 383.
- 6) Frazier, *op. cit.*, p. 225.
- 7) *Ibid.*
- 8) William McCord, John Howard, Bernard Friedberg, and Edwin Harwood, *Life Styles in the Black Ghetto* (W. W. Norton & Company, Inc., 1969), pp. 20-6.
- 9) Drake and Cayton, *op. cit.*, p. 201.

- 10) *Ibid.*, vol. II, xv.
- 11) *Ibid.*, xxv.
- 12) J. バーナード, 『コミュニティ論批判』 (早稲田大学出版部, 1978), p. 88.
- 13) Sar A. Levitan, William B. Johnston, and Robert Taggart, *Still a Dream: The Changing Status of Blacks since 1960* (Harvard University Press, 1975), p. 195.
- 14) *Ibid.*, 187-8.
- 15) *Ibid.*, p. 195. 福祉受給資格を得るために離婚をよそおったり, 結婚しない黒人も多い。
- 16) Street and *et al.*, *op. cit.*, pp. 207-8.
- 17) Levitan, Johnston, and Taggart, *op. cit.*, pp. 185-95.
- 18) Edward C. Banfield, *The Unheavenly City Revisited* (Little, Brown and company. 1974), p. 96
- 19) "This Place Makes Bedford-Stuyvesant Look Beautiful," *The New York Times* (1971), in Joseph Bensman and Arthur J. Vidich, ed., *Metropolitan Communities* (New Viewpoints, 1975), p. 108.
- 20) Melvin M. Webber, "The Post City Age," *Daedalus* (Fall, 1968), pp. 1099-1102. バーナード, 前掲書, p. 249.
- 21) Hollis R. Lynch, *The Black Urban Condition: A Documentary History, 1865-1971* (Thomas Y. Crowell Company, 1974), pp. 397-9.
- 22) バーナード, 前掲書, pp. 176-7.
- 23) Maurice R. Stein, *The Eclipse of Community* (Princeton University Press, 1960), pp. 302-2. 園田恭一, 『現代コミュニティ論』 (東京大学出版会, 1978), p. 37.
- 24) Stein, *ibid.*, pp. 341-3. 園田, 前掲書, pp. 38-9.
- 25) バーナード, 前掲書, pp. 173-6.
- 26) "Newark Held an Angry and Anguished City," *The New York Times* (1971), in Bensman and Vidich, *op. cit.*, pp. 192-6.
- 27) Levitan, Johnston and Taggart, *op. cit.*, p. 269.
- 28) ナット・ヘントッフ, 「まだいくらでもやることがある」, ジョン・スウェド編『ブラック・アメリカ』 (研究社, 1979), pp. 21-2.